



大学教育の現場から

第35回

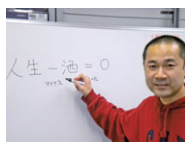
大阪大学 花垣 和則

大抵は、みなさんのお手元に記事が届く約1ヶ月ほど前に原稿を書いています。いつもならこの記事を書いているのは2月末のはずなのですが、今回は私がさぼっていたこともあり3月に入ってからこの原稿を書いています。

しかし、言い訳をすると、1月から3月は年度末に特有の業務が溢れています。博士論文の審査に始まり、大学院生の修士論文、そして卒業研究を行う学部生への指導の追い込み、成績判定会議や成績登録をこなしつつ、大学業務の中で一番負荷の高い大学入試が続きます。入試は最も守秘義務の高い業務なので、誰が何をやっているのかはほとんどの人にはわからないのですが、入試の採点は莫大な人数の教員が束になって行いますし、理学部の教員の場合は試験問題の作成にあたることも多いです。もし作題担当にでもなれば、その年一年間はまともな研究活動を行えないくらいの責務を負うことになります。

上記の業務は年度末特有のものですが、年間を通して重要な大学での業務はやはり授業です。今年度は、2種類の物理学実験、電磁気学、素粒子物理学実験の4つの授業を担当しました。実験については、理学部だけでなく規模が10倍近い工学部その他の学部の学生も授業を受けるので教員が完璧に不足しており、同じ科目を担当し続けることが多いですが、それ以外はマンネリを防ぐために3、4年に一回の割合で担当を変わります。毎年同じだと飽きるは確かなのですが、逆に新たに担当する授業のときはその準備には大いに苦労します。みなさんが想像しているよりも専門外のことについては深く理解していないのが実情で、授業となると大体ではなく隅々まで理解することが求められますので、毎回の授業のために授業の10倍くらいの時間をかけて勉強し直しています。また、近年多いのが莫大な数の委員会で、一人あたり4つあるいは5つくらいの委員を兼務し雑務を日々こなしています。

年が明けてからは自分自身の研究活動の時間というのはほぼ皆無で、『素粒子物理学実験の現場』にいるとは言えない状況です。そこで今回はタイトルを少し変え、大学教員が研究以外にどんなことをしているのか書いてみました。



著者紹介 花垣 和則(はながき かずのり)

大阪大学大学院理学研究科 准教授

CERNでLHC実験に参加